

28 節. 「この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渇く』と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。」

口語訳：「この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために、『わたしは渇く』と言われた。」

【NKJV】 After this, Jesus, knowing that all things were now accomplished, that the Scripture might be fulfilled, said, "I thirst!"

主イエスの十字架の場面において、ヨハネは他の福音書の記事とかなり異なっている。例えば、マルコ 15 章 29 節以下の、通りかかった人々の嘲笑や祭司長たちや律法学者たちの侮辱の言葉はない。ルカの、主イエスの左右の十字架に磔されていた者たちの言葉や主イエスとの対話もない。また、12 時から全地が暗くなりそれが 3 時まで続いたという話もない。これらだけでなく、主イエスの壮絶な叫びもなく、主イエスの死を見た百人隊長の信仰告白の言葉もない。主イエスの苦悶や悲惨を語るような言葉もない。

「ヨハネから見れば、十字架にかかるのは、自分の意思を最後まで貫き通し、そのことによって父から自分に委ねられた救済の業を成就した方なのである。この神の子は平和に、気高く、平然として、死んで行く！異郷にある彼に父から委ねられたことすべて成し遂げられたことを知って、彼は死ぬのである。マルコでは（15:34 以下）苦しみにあえぐイエスに、飲み物が差し出されるが、ヨハネではそうではない。ここでイエスが『渇く』と言うのは、聖書がそれを預言しているからである。大団円に至るまでイエスが聖書の預言をすべて忠実に取り上げて成就するのは、それが神の意思だからである。」（NTD）

「渇く」（Διψω、ディプソー）。直訳では「わたしは渇く」。

ヨハネによる福音書では、主イエスは自ら「わたしは渇く」と言われる。マタイやマルコ、ルカでは、兵士たちが侮辱する意図で酸いぶどう酒を突きつけている。ヨハネは主イエスが自ら「わたしは渇く」と言われたと記すことによって、聖書の成就を語る。

「口は渇いて素焼きのかけらとなり、舌は上顎にはり付く。あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる。」（詩編 22 篇 16 節）

詩編 22 篇は受難の詩編である。1 節の「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」という言葉は、十字架上の主イエスが「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ 15:24）と叫ばれたとき、成就している。また、8, 9 節の「わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い、唇を突き出し、頭を振る。『主に頼んで救ってもらおうがよい。主が愛しておられるなら助けてくださるだろう。』」はルカ 23 章 35 節において、19 節の「わたしの着物を分け、衣を取ろうとしてくじを引く」はヨハネ 19 章 24 節他において成就している。ヨハネにおいて主イエスは、旧約聖書の預言を成就するために「わたしは渇く」と言われたと伝えている。上記詩編 22 篇 16 節の他に、詩編 69 篇 22 節も上げられる。「人はわたしに苦いものを食べさせようとし、渇くわたしに酔を飲ませようとしませす。」

渇く喉にさらに酸っぱいものを飲ませることは、渇きを倍加させることだと言われている。苦しみに苦しみを増し加える行為である。主イエスがここで「渇く」と言われたことが、そのよう

な苦しみ、喉が焼けつくような苦しみを自ら呼び込んだとも言える。その酸いぶどう酒を主イエスは受ける。それは苦しみを完全に受けることであり、それは死に至る苦しみである。その苦しみを受けること、死を受け入れること、それが聖書の実現であり、主イエスが成し遂げなければならないことである。

「『渴く』という言葉は、まず第一に全くリアルな言葉であり、死に直面した人がひたすら水を求めることは誰でも知っていることであろう。『死はこの刑にあっては、のどが渇いて衰弱することによって生じる』。これは唯一のイエスの身体的な要求と言えるのであろうが、この言葉はすぐにシンボリックに解されるべきではないと思う。リアルな意味が消えないためである。受難の現実性が強調されていると見るべきであろう。ただしもし象徴的な意味をも考えたいのなら、『父のもとに上ること』、『復活の再会』、『愛』などを考えることができるであろう。」
(伊吹)

「渴く」という言葉は、ヨハネによる福音書ではこの 28 節を含め全部で 6 回出てくる (4:13-15、6:35、7:37)

主イエスは十字架の上で、肉体的に渴くと同時に心の渇きでもある。

主イエスは「愛」を求めて渇いている。アウグスティヌスは、十字架上の主イエスの「渇き」を、神の渇きとして受け止めている。神が、私たちが求めて渇いている。喘ぐように私たちの愛を求めている、と。

29 節. 「そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。」

「ヒソプ」。他の福音書では「葦の棒」となっているが、ヨハネはこの言葉を使う。背後にあるのは、出エジプト記 12 章 22 節。「そして、一束のヒソプを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならない」。生と死を分ける過越の時、犠牲となった小羊の血を塗る為に使われたものが「ヒソプ」である。その「ヒソプ」が、ここで登場する。それは、主イエスが十字架の上で流している血こそが、罪人に対する裁きを身代わりに受ける神の小羊の血であり、その血が、自分の罪を贖う血であると信じる者は、滅びとしての死を免れ、新たな命に生かされることを表している。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」(ヨハネ 1:29)

30 節. 「イエスは、このぶどう酒を受けると、『成し遂げられた』と言い、「頭を垂れて息を引き取られた。」

「頭を垂れて」の「垂れる」と訳された言葉 (κλίνω、クリノー) は、「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子には枕するところがない」(マタイ 8:20) という所に出てくる「枕する」と訳されている言葉。つまり、安眠すること。主イエスは神の御心を「成し遂げられ」十字架を枕とされた。

「息を引き取られた」の「引き取られた」は、直訳すると、「息を引き渡された」。

【NKJV】 He gave up His spirit. 主イエスは自ら神に命を渡されたのである。泣く泣く殺されてしまったのではない。「だれもわたしから命を奪い取ることは出来ない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である」(ヨハネ 10:18)